

幼児期の運動遊びに関する研究

—「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「健康」からみた検討—

紀 村 修 一*

(2021年8月16日 受理)

A Study on Physical Activity in Early Childhood

Shuichi KIMURA*

The purpose of this study is to gain knowledge about physical activity in early childhood based on early childhood education, actual situation of first grader and physical activity that I developed.

As a result of consideration about early childhood education and physical activity, we understood 3 points to in mind of physical activity. That is, easy rules, common purpose, and awareness of changes in mind and body. Physical activity that includes these will be useful for desirable growth for early childhood children.

Keywords: Physical activity 運動遊び, Early childhood children 幼児, Health 健康, Childhood cooperation 幼小連携

1. はじめに

本研究では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や領域「健康」から、幼児期の運動遊びの要点を見出し、幼児期の終わりに接続する小学1年生に、質問紙調査を実施するとともに、筆者が開発した運動遊びを行い、その考察から幼児期の運動遊びについて知見を得ることを目的とする。

新型コロナウイルス感染症により、私たちの生活様式は大きな変化を余儀なくされた。これまで「あたりまえ」にできていたことに対して制限がかかり、誰もが、いつでも、どこでも「3密」の回避や「ソーシャルディスタンス」の確保などを意識しなければならなくなった。このことは、学校生活においても例外ではない。感染流行の早期終息や子どもたちの健康・安全を考え、全国の小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校を一斉に臨時休校とする要請が国から出された¹⁾。体育に関していえば、水泳学習²⁾や運動会³⁾の中止もしくは条件付きでの実施といった措置が講じられるなど、コロナ禍の今、子どもたちの学びの場を例年通り保障することさえ困難な状況となっている。

このような状況下では、これまで以上に、子どもたちの健康に対する興味・関心を高めることが重要になると考えた。そこで、幼児期を終えて間もない小学1年生の健康に対する認識を把握するため、『「けんこうなひと」は、どんなひとだとおもいますか?』と小学1年生に尋ねた。すると、多くの子どもが、病気の症状がない元気な人であると回答した。この考え方は、毎日実施している「健康観察」が影響していると推測できる。毎朝の健康観察の時間において、子どもたちは、今の体の

* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科講師

状態と通常の体の状態を比較し、元気である、もしくは、元気ではない（例えば、頭痛、腹痛、咳、微熱、けがなど）という二択から自己の体の状態を表現する。つまり、子どもは、健康状態を身体面から捉え、健康と病気を対極の関係として認識しているのである。一方で、小野（2020）は、健康状態を身体面だけでなく、子どもの心の中にある溢れる思いや、子どもを取り巻く人びとからの影響や他者・他児との関係といった精神面からも捉える必要性を指摘している⁴⁾。また、幼児期に着目すると、文部科学省（2018）は、「健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つこと目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりの伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである」⁵⁾と定義し、幼児と健康の望ましい関係性を示している。したがって、身体面と精神面の両側面から幼児の健康を捉え、育成することが重要であるといえる。

それでは、どのようにして幼児の健康を育むことができるか。一つの有効な方法として、運動遊びがある。いうまでもなく、運動遊びには、平衡性、敏捷性、協応性、巧緻性などの調整力や、走る、跳ぶ、投げるなどの運動能力⁶⁾といった身体面の育成が期待できる。加えて、櫻木（2020）は、運動遊びには社会性（自分以外の人と関わりをもつ能力）の発達を促す場面がたくさんあると述べ、例えば、我慢する、順番を守る、相手を思いやるといった子どもの行動を例に挙げている⁷⁾。つまり、運動遊びにより、精神面の育成も期待できるといえる。さらに、先に示した身体面の育成は、幼児期に著しく高まり、精神面は、幼児期から徐々に高まり始めるとされ⁸⁾、幼児期における運動遊びの重要性が理解できる。

そこで本研究では、幼児期の運動遊びに関して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と領域「健康」からみた検討を行う。研究にあたってまず、幼児期における教育のあり方について整理する。具体的には、（1）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の捉え、（2）領域「健康」の捉え、（3）幼児期を終えた小学1年生の実態調査、を行う。次に、これらの整理と先行研究を踏まえて幼児期の運動遊びの要点を見出し、幼児期の運動遊びの開発と授業実践を行う。最後に、授業実践の考察から幼児期後期の運動遊びに関する知見を得る。

2. 幼児期の教育

（1）幼児期の終わりまでに育ってほしい姿⁹⁾

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」から構成される五つの領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿である。幼稚園教育の教育水準を全国的に確保するための幼稚園教育要領が、平成29年3月31日に改訂され、平成30年度から実施された。今回の改訂では、幼稚園教育において育みたい資質・能力が明確化され、具体的に「知識及び技能の基礎」、「思考力・判断力・表現力等の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の三つが示された。さらに、以下の10項目を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として明確にし、小学校教育との円滑な接続をねらっている（囲み線は筆者）。

（1）健康な心と体

幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

(2) 自立心

身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

(3) 協同性

友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

(4) 道徳性・規範意識の芽生え

友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

(5) 社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

(6) 思考力の芽生え

身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

(7) 自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

(9) 言葉による伝え合い

先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

(10) 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

このように、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を具体化することで、幼稚園教諭や保育士等の保育・教育の方向性や評価の視点が明確となる。また、幼稚園教諭から小学校教諭に幼児の成長や幼児期の働き掛けの意図を伝えることで、幼小連携が円滑に進むという点でも、目安として具体的な姿を提示することによさを感じる。実際、一般的に小学校入学前には、幼稚園教諭と小学校教諭が対面して、口頭による引継ぎを行ったり、指導内容や具体的な支援、幼児の成長や課題が時系列に沿って記載された幼稚園幼児指導要録等による引継ぎを行ったりしている。小学校では、これらの情報を踏まえた学級編成や入学直後の指導計画の作成などを行い、幼児が安心して小学校生活を始めることができる工夫を行っている。したがって、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を、幼稚園と小学校をつなぐ1つの話題として重視することは、幼小連携を進める上で今後も大切になるといえる。

一方で、留意すべき点もある。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は、5歳児後半に見られることを想定しているが、5歳児になって突然見られるのではなく、発達の段階に沿った指導が必要となる点、すべての幼児が一律に到達すべき目標ではない点や、個別に取り出されて指導されるものではない点である。保育者には望ましい環境構成の中で、仲間との遊びや生活を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が見られるようにする工夫が求められる。

(2) 領域「健康」の捉え¹⁰⁾

心身の健康に関する領域「健康」は、健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うために、以下のねらい及び内容で構成される。

【ねらい】

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

【内容】

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排せつ泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。

(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

「ねらい」に示された文章の主語は、当然「幼児」である。そして、「明るく伸び伸びと」や「十分に」、「進んで」などの言葉から、幼児の主体性や充実感・満足感を意図することは容易に想像できる。したがって、保育者による一方的な押しつけではなく、幼児が自ら取り組みたくなる活動や、活動に没頭できる十分な時間設定が重要となる。

また、「内容」には、幼児が生活する上で必要となる健康に関する行動や態度が示されている。ちなみに、小学校体育科の保健領域では、健康と深く関わりのある生活の仕方として、運動、食事、休養及び睡眠、体の清潔を挙げられており¹¹⁾、指導内容が幼稚園と類似することが分かる。したがって、幼稚園と小学校では、健康に関しての系統的な指導が重要となる。

(3) 幼児期を終えた小学1年生の実態調査

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の中に、「(1) 健康な心と体」がある。「健康」は、幼児が日常的に見聞きしたり、読み書きで用いたりする身近な言葉である。特に、コロナ禍における現代社会では、感染症対策として子どもへ「3密」の回避や「ソーシャルディスタンス」の確保などを促すことも多く、健康への子どもの意識は高いと考えられる。その「健康」について、幼児期を終えた小学1年生がどのように認識しているかを把握するため、質問紙調査を行った。質問内容と結果は以下の通りである。(小学1年生27名に対して令和3年6月実施)

<p>1. 「けんこう」は、たいせつなものだとおもいますか？ はい ・ いいえ ・ わからない</p> <p>2. 「けんこうなひと」は、どんなひとだとおもいますか？</p> <p>3. 「けんこう」のために、あなたがしていることはなんですか？</p>
--

図1 質問内容

質問1については、「はい」が25名、「いいえ」が0名、「わからない」が2名という結果になった。このことから、子どもの多くが、健康は大切なものであると認識していることが明らかとなった。ただし、「わからない」と回答した2名(図2及び図3の整理番号22番と25番の子ども)はどちらも、「意味が分からない」と述べた。これは、健康という言葉が、視覚化することが難しい抽象的な言葉であることが原因であると考えられる。

質問2については、図2の結果となった。最も多い回答が「元気な(の)人」で19名、次いで、「病気の症状がない人(咳が出ない、風邪でない、熱がないなど)」で11名であった。この結果については、「1.はじめに」で検討した通りである。その他、運動や食事、清潔に関する回答もあり、領域「健康」との関連も見られた。

質問3については、子どもの回答を「(2) 領域「健康」の捉え」で取り上げた「運動」、「食事」、「休養及び睡眠」、「体の清潔」及び「その他」に分類し整理した(図3)。すると、多くの子どもが

「食事」、「休養及び睡眠」、「体の清潔」、「その他」に関する回答をした。一方で、「運動」に関する回答は7名で、他の4項目と比較すると明らかに少ない結果となった。このことから、健康のために運動をしている子どもが少ない、もしくは、健康のために運動をしている自覚がない子どもが多いことが明らかとなった。

整理番号	「けんこうなひと」は、どんなひとだとおもいますか？
1	元気な人 咳の出ない人
2	風邪でない人 マスクをしている人 ゲームをしていない人
3	元気の人 3食(朝・昼・晩)ご飯を食べる人
4	咳が出ない人 ずっと生きられる人
5	元気な人 友達とよく遊ぶ人 おもしろい人 ご飯をいっぱい食べる人 好き嫌いをしない人
6	元気な人 手を洗っている人 よく食べる人
7	元気な人 水を飲む人
8	元気な人 手洗いをちゃんとする人 病気にならない人
9	元気な人 よく食べる人 よく遊ぶ人
10	元気な人 咳が出ない人 のどが痛くない人
11	元気な人 運動が得意な人 好き嫌いをしない人 手洗いうがいをきちんとする人
12	健康な人
13	元気な人 咳が出てない人 勉強をちゃんとしている人
14	元気な人 野菜をちゃんと食べる人
15	運動する人
16	元気な人 いつも運動している人
17	元気な人 野菜を全部食べられる人
18	元気な人 (Iくん, Oくん)
19	元気な人 手を洗う人 明るい人
20	ゲームをやっている人 (健康だからできる)
21	元気な人 運動をする人 好き嫌いがいない人 大事な物をもっていける人
22	咳が出ない人 ハンカチで手を拭く人
23	元気な人 運動する人
24	元気な人 風邪をひかない人
25	咳が出ない人
26	熱がない人
27	元気な人 のどが痛くない人

図2 質問2の回答(筆者が漢字・英語に変換)

幼児期の運動遊びに関する研究

整理番号	「けんこう」のために、あなたがしていることはなんですか？				
	運動	食事	休養及び睡眠	体の清潔	その他
1		ごはんをよく食べる	よく寝る	石けんで手洗い、うがい、風呂	トイレ
2		ごはん（3食）	早寝早起き	ハンカチ、ティッシュ、爪、風呂	トイレ 水分
3	運動		早起き	石けんで手と頭と体を洗う	トイレ
4		ごはんをいっぱい食べる	早寝早起き		トイレ、マスク、歯磨き、太陽の光を浴びる
5		毎日ごはんを食べる			
6		ごはんを食べる	寝る	手を洗う、ハンカチ	トイレに行く、マスクをする
7			ちゃんと寝る	風呂に入る	トイレに行く、マスクをする、お茶を飲む
8	体操する	好き嫌いをしない、3食食べる	早寝早起きをする、寝る	手洗い、お風呂に入る、	服を着替える、歯を磨く、水やお茶を飲む、テレビを見すぎない、学校に来る、発表する
9			夜更かしをしない	手洗いをする	マスクをする、あさがおに水をあげる
10		ごはんを食べる	睡眠をとる	手を洗う、風呂に入る	歯磨きをする
11		ごはんの時間を決めて食べる（朝・昼・晩）	早寝早起きをする	手洗いうがいをする、お風呂に入る、ハンカチ・ティッシュをポケットに入れる	歯磨きをする、汗をかいたら着替える（風邪をひくから）、飲み物を飲む、起きて目のごみをとる、鉛筆を削る
12		朝ごはんを食べる	夜寝る、朝起きる	手を洗う、風呂、ハンカチ・ティッシュを持って行く、爪を切る	小学校に行く
13		朝ごはん	早寝早起き	お風呂	トイレ、歯磨き、服を着替える（風邪をひくから）
14		3食食べる	寝る	手洗い、お風呂、ハンカチ・ティッシュをポケットに入れる、爪を切る	トイレ、歯を磨く、マスクをする、水やお茶をしっかりと飲む
15		朝・昼・晩ごはん	朝元気に学校に行くために寝る	手洗い、風呂	トイレ、歯磨き、水分、健康観察
16	運動、遊ぶ	給食	早寝早起き	手洗い、うがい、風呂、ハンカチ・ティッシュ	トイレ、マスク、服、飲み物、歯医者、勉強
17		ごはんを食べる、給食を食べる	夜になったら寝る	手を洗う、風呂へ行く、ティッシュやハンカチをそろえる、掃除をする	トイレへ行く、服を着替える、健康観察は大きな声で発表する、熱中症にならないようにする
18	体育をがんばる			手を洗う、ハンカチ・ティッシュ持ってくる、爪を切る	がんばって学校まで来る、元気に挨拶する
19	運動する	朝・昼・晩ごはんを食べる、残さず食べる		泡で手を洗う、お風呂に入る	トイレに行く、服を着る、水分をとる
20		昼・夜ごはんを食べる	早寝	風呂に入る、ティッシュ、	トイレに行く、髪を切る
21		ごはんを食べる	早く寝る、	手洗いを正しくやる	トイレに行く、汗をかいたら服を着替える、歯医者に行く、健康観察をする
22				お風呂に入る	歯磨きをする
23	ラジオ体操をする	朝・昼ごはんをしっかり食べる	早寝早起き、帰ってゆっくり休む	手洗いをする、お風呂に行く	トイレに行く、マスクをする、歯を磨く、鼻をかむ、水分、髪を切る
24	運動	ごはん、おやつ	早く寝る	手洗い、ハンカチ・ティッシュ、風呂、掃除	トイレ、マスク、あいさつ
25		朝起きたら朝ごはんを食べる			歯を磨く
26			たくさん寝る	手洗い、うがい	マスクをする
27		いっぱい食べる		手を洗う	トイレ、歯磨きをする

図3 質問3の回答（筆者が漢字・カタカナに変換）

3. 幼児期の運動遊び

(1) 先行研究の検討

食事や睡眠、入浴や排泄は、生きていく上で多くの子どもが毎日欠かさず行う行動である。これらの行動と同じように、子ども（特に、幼児期を終えた小学1年生）が運動をもっと身近に感じることができるようにしたい。そうすることで、子どもは、運動することの楽しさやよさを味わうことができるようになると思うからである。

幼児期の運動遊びについて、米谷（2010）は、「幼児の体育は、幼児が楽しみながら、熱中して取り組む姿を見せる『あそび』であることを第一に考えなければならない」と指摘し、例えば「ヨーイドン」や「おみこしレース」などのリレー遊びを紹介している¹²⁾。これらの運動遊びは、小学校低学年の「走・跳の運動遊び（特に、走の運動遊び）」につながる。また、酒井（2012）は、「身近な素材や道具を用いた運動は、幼児期に身につけるべき操作系、平衡系、移動系の基本運動スキルの向上やバランスのとれた運動能力を育てるうえで効果的な運動」と指摘し、例えばフープを転がす・回す・くぐる・跳ぶ遊びや、教師が転がしたフープの中をくぐり抜ける遊びを紹介した¹³⁾。これらの運動遊びは、小学校低学年の「体づくりの運動遊び（特に、用具を操作する運動遊び）」につながる。

両者に共通することは、ルールがやさしく、運動の得手不得手に関係なく誰もが楽しめるということである。そのため、運動遊びを通して、領域「健康」のねらいである（1）明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう、（2）自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする、（3）健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動することができることにつながると考えられる。そして、主体的な学びを繰り返した結果、幼児は「幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる」（「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」-（1）健康な心と体）のである。

一方で両者には、クラス全体で共通の目的に向かって運動遊びに取り組むルールの工夫が管見の限り見られない。年長クラスにもなれば、幼児一人ひとりが夢中になって、仲間と共に運動遊びに楽しく取り組む経験は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の例えば（3）協同性、（4）道徳性・規範意識の芽生え、（6）思考力の芽生え、（9）言葉による伝え合い、（10）豊かな感性と表現に関する姿につながると期待できる。

これまでの検討を踏まえ、幼児期後期の運動遊びの要点を下の3つに整理した。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① ルールがやさしく、運動の得手不得手に関係なく誰もが楽しめるようにする。 ② クラス全員で共通の目的に向かって取り組むことができるルールを設定する。 ③ 心と体の変化に気付くことができる場を設定する。 |
|---|

図4 幼児期の運動遊びの要点

図4-①により、幼児は進んで運動遊びに取り組み、多様な動きを身に付けていくであろう（身体面）。また、図4-②により、幼児は仲間と協力しながら運動遊びに取り組み、協同性や個性の大切さに気付くであろう（精神面）。さらに、図4-③により、幼児は、運動遊びの効果や、運動遊びと健康との関連に気付くであろう。

(2) 運動遊びの開発及び授業実践

本稿では、筆者が開発した幼児期後期の運動遊びを、幼児期を終えて間もない小学1年生を対象にして実施し、幼児期の運動遊びの要点から考察する。(指導案は小学校学習指導の観点に準じる)

ア 単元名 いいね、なかまって(体ほぐしの運動遊び+走の運動遊び【組み合わせ単元】)

イ 指導計画(全6時間)

第1次 多様な動きをつくる運動遊びを楽しもう(2時間)


第2次 いろいろなリレー遊びを楽しもう(4時間)

ウ 本時案(5/6時間)

(i) 主眼

仲間と共に「フラフープリレー」を楽しむことを通して、自己の体力に応じて運動遊びに取り組んだり、遊び方を工夫したりすることができる。

(ii) 展開 ※【知】:知識・技能,【思】:思考・判断・表現,【主】:主体的に学習に取り組む態度

過程	学習活動・内容	子どもの反応、つまずき	主な支援(○)と評価(◆)
導入 12分	1 準備運動をし、学習のめあてを確認する。 ・「にじたいむ」 ・「ゆっくりリレー」 ・「けんけんリレー」 ・「うしろむきリレー」	・「にじたいむ」楽しかったね。 ・みんなで遊んで、心ときどき、顔ほかばか、汗たらたらになったよ。 ・今度は、いろいろなリレーをして遊ぼう。みんなでがんばろうね。 ・やったあ。誰も転ばずにゴールできたぞ。うれしいな。 ・まだゴールしていないチームがあるよ。よし、応援するぞ。がんばれ。 ・みんなでリレーをして楽しいね。今日はどんなリレーをするのかな。	○運動遊びに取り組む前と後の心拍数、体温、汗の量を調べる時間を設定する。そうすることで、心と体の変化に気付くことができるようにする。 ○「転ばなかった班の勝ち」というルールで、いろいろなリレーに取り組むように促す。そうすることで、走ることが苦手な子どもも安心して運動遊びに取り組むことができるようにする。
「ふらふうぶりれえ」をたのしもう!			
展開 25分	2 「フラフープリレー」に取り組む。 ・遊び方の理解 ・遊び方の工夫 ・仲間との協力	・「フラフープリレー」をやるのだね。どんなルールかな。 ・楽しそう。さっそくやってみよう。 ・僕たちの班は5点だったよ。フラフープをくぐるのが難しかったね。 ・「1くみてん」は20点だったよ。もっと得点を上げたいな。	○各チームの記録を合計し、クラス全体の記録(「1くみてん」)として提示する。そうすることで、他の班とも協力しながら、記録をよくするための作戦を考えることができるようにする。
		「1くみてん」を上げる作戦を考えよう。	
	・しっかり手を振って走ろうよ。 ・コーンに近い所を回ると速いよ。 ・もっと速くフラフープをくぐりたいね。いい方法はないかな。 ・Aさんが、「前の人と間を空けないでつめたら速いよ」と教えてくれたよ。よし、試してみよう。	○仲間と共に作戦を考えている子どもを価値付けたり紹介したりする。そうすることで、仲間と作戦を考えたり試したりすることの楽しさに気付くことができるようにする。	

<p>終末 8分</p>	<p>3 学習を振り返る。 ・遊び方の多様性 ・遊び方を工夫するよさ ・次時への意欲</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に速くなったよ。Aさん、いい作戦を教えてくださいありがとうございます。 ・いよいよ2回目が始まるよ。みんな、最後までがんばろうね。 ・やったあ。僕たちの班は10点になったよ。作戦成功だね。 ・「1くみてん」が40点上がったよ。すごい。どの班もがんばったね。 	<ul style="list-style-type: none"> ○よい作戦を価値付けたり紹介したりする。そうすることで、新たな作戦に気付いたり、自分の班に合った作戦を選んだりすることができるようにする。 ◆自己の体力に応じて運動遊びに取り組んだり、遊び方を工夫したりしているか。(発言・観察)【知】・【思】
	<p>3 学習を振り返る。 ・遊び方の多様性 ・遊び方を工夫するよさ ・次時への意欲</p>	<p>気に入った作戦は何ですか? どうして気に入ったのですか?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フラフープをくぐるときに、つめて並んだよ。そうしたら、列が短いから、記録が速くなったよ。 ・いろいろな作戦があってもおもしろいな。どの班の作戦も、いい作戦だね。 ・次の時間も、みんなと一緒に運動遊びを楽しみたいな。 	<ul style="list-style-type: none"> ○気に入った作戦について交流する時間を設定する。そうすることで、多様な作戦があることや、遊び方を工夫するよさに気付くことができるようにする。 ◆仲間と共に作戦を考えたり、主体的に運動遊びに取り組んだりした感想を表現しようとしているか。(発言・挙手)【主】

エ 板書計画

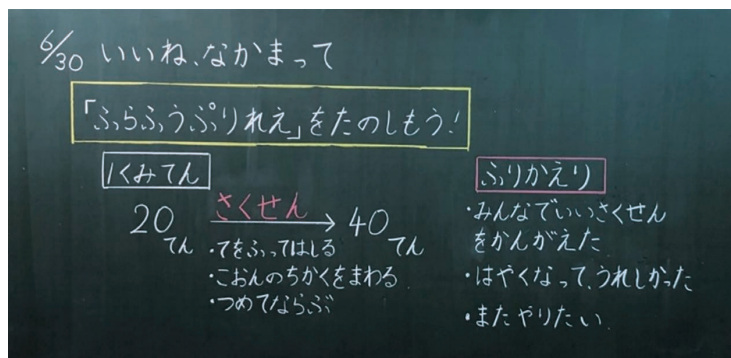


図5 板書計画

オ 「フラフープリレー」の遊び方(ルール)

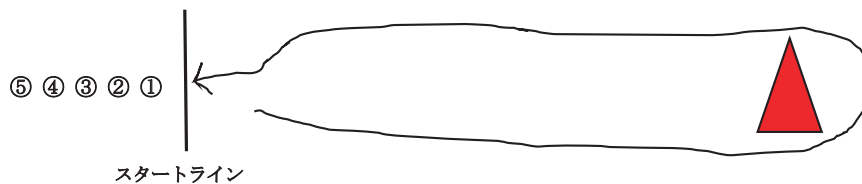


図6 「フラフープリレー」の遊び方(ルール)

- ・各班 4～5 名で構成され、合計 6 つの班がある（4 名の班が 2 つ、5 名の班が 4 つ）。
- ・各班スタートラインに 1 列に並び、最後尾の人（最終走者）は帽子の色を赤色にする。
- ・第 1 走者から順番にフラフープを持って走り、コーンを左回りに回ってスタートラインまで走って戻る。第 2 走者、第 3 走者、第 4 走者（第 5 走者）の順に手に持ったフラフープをくぐらせ、最後の人がかぐり終えたら、スタートラインで待つ第 2 走者にフラフープを手渡す。第 1 走者は、列の最後尾に並ぶ。
- ・最終走者が座ったときのタイマーに表示された残り時間が、その班の得点となる。例えば、タイマー表示が残り 10 秒なら 10 点、残り 1 分 5 秒なら 65 点、制限時間を過ぎ残り 0 秒なら 0 点となる。

カ 本時案における用語について

- 「1くみてん」…各班の得点を合計した得点のこと。例えば、1 班が 5 点、2 班が 3 点、3 班が 0 点、4 班が 0 点、5 班が 10 点、6 班が 2 点なら、「1くみてん」は 20 点となる。
- 「にじたいむ」…6 月の歌「にじ」の曲に合わせて体を動かしたり歌ったりする時間のこと。以下の 5 つの内容で構成される。

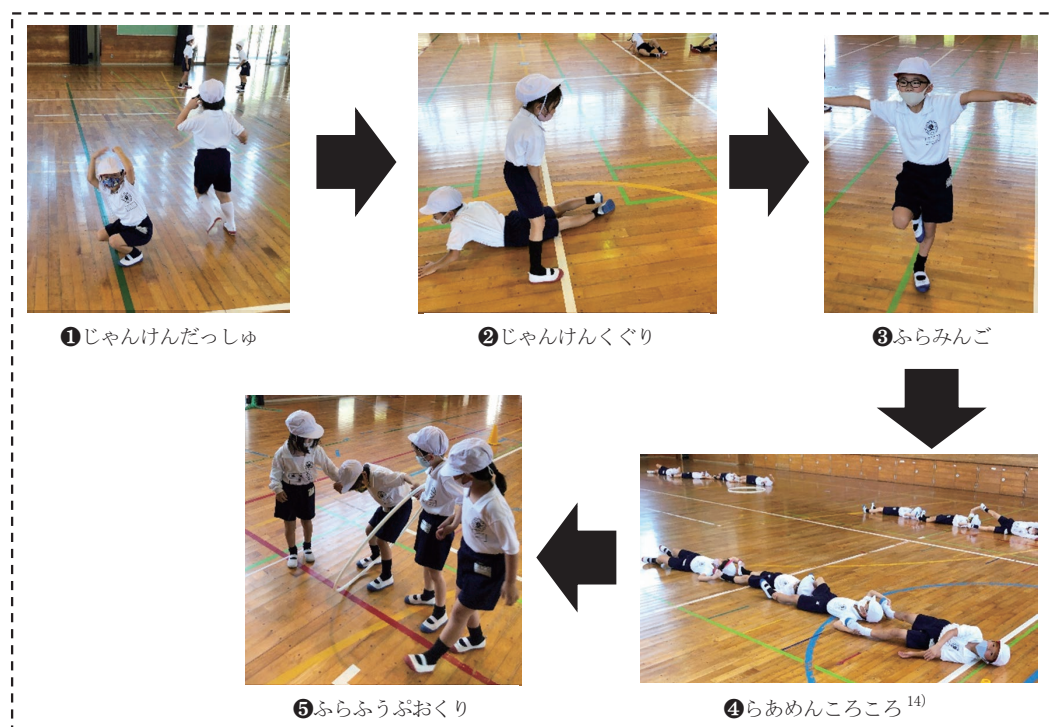


図 7 「にじたいむ」の動き

4. 考察

第1次では、筆者が「じゃんけんダッシュ」、「じゃんけんくぐり」、「フラミンゴ」、「ラーメンころころ」、「フラフープ送り」の行い方を紹介し、子どもたちは動きをまねしながら、多様な動きをつくる運動遊びを楽しんだ。するとS児が「音楽をかけてみたい」と発言し、周りの子どもも賛同した。そこで、話合いの場を設定し、6月の歌「にじ」の曲に合わせて5種類の動きを連続して行うことが決まった。「にじたいむ」という名称は、子どもが名付けた。

第2次では、筆者が「ゆっくりリレー（第1時）」、「けんけんリレー（第1時）」、「後ろ向きリレー（第1時）」、「転がしリレー（第2時）」、「フラフープリレー（第3時／本時）」、「跳び越しリレー（第4時）」の行い方を紹介し、子どもたちは動きをまねしながら、いろいろなリレー遊びを楽しんだ。第1時では、「転ばなかった班の勝ち」というルールを設定したため、運動が苦手な子ども（特に、走ることに苦手意識をもっている子ども）が安心してリレー遊びに取り組む姿が見られた。また、第2時から第4時では、同じ班の仲間と折り合いをつけながら作戦を考えたり、考えたよい作戦を他の班に進んで紹介したりする姿が見られた。ここでは、令和3年6月30日（水）に「フラフープリレー」に取り組んだ子どもの学びの様子を、「幼児期の運動遊びの要点」（図4）と関連付けて考察する。

①ルールがやさしく、運動の得手不得手に関係なく誰もが楽しめるようにする（図4-①）。

授業の導入では、先述した「にじたいむ」に取り組む時間を設定した。運動の得手不得手に関係なく誰もが楽しめる動きで構成されているため、すべての子どもが仲間との交流を楽しみながら、安心して運動遊びに取り組んだ。特に、仲間と動きを合わせる必要のある「ラーメンコロコロ」と「フラフープ送り」では、「いくよ、せーの」といった合図や「落ち着いてやれば大丈夫」、「ナイス」といった励まし・称賛の声が聞かれ、あたたかい雰囲気となった。

また、「転ばなかった班の勝ち」というルールで、いろいろなリレーに取り組むように促した結果、走ることが苦手な子どもも「楽しい」と発言しながら運動遊びに取り組んだ。その結果、誰も転ばなかったため、全員が勝ちと伝えた。これらのことから、運動の得手不得手に関係なく楽しめるルールの設定が重要であることが実証されたと考える。

②クラス全員で共通の目的に向かって取り組むことができるルールを設定する（図4-②）。

各チームの記録を合計し、クラス全体の記録（「1くみてん」）として提示した。すると子どもたちは、みんなで力を合わせて「1くみてん」を上げたいという思いをもち、速く走るための作戦を考えたり、考えた作戦を進んで試したりする姿が見られた。また、よいと感じた他の班の作戦を積極的に取り入れたり、気に入った作戦をみんなに紹介したりする姿も見られた。このような姿から、多くの子どもが、協同性や個性の大切さだけでなく、思考することや伝え合うことの楽しさにも気付いたと考える。さらに、1回目は55点であった「1くみてん」が、子どもたち自らが考えた作戦によって114点に上がったことを知った瞬間に、大きな歓声が上がった。このような姿から、幼児期後期から感動したり喜びを表現したりすること（豊かな感性と表現）の心地よさを実感させることは重要であると考えられる。



図8 「フラフープリレー」に取り組む子ども



図9 作戦を考える子ども

③心と体の変化に気付くことができる場を設定する (図4-③).

「にじたいむ」に取り組む前と後の心拍数、体温、汗の量を調べる時間を設定した。ただし、子どもへは、「どきどき」、「ほかほか」、「たらたら」というイメージしやすい表現で伝えた。運動遊びの後、「すごくどきどきになったよ」、「え？私は、どきどきがあまり変わらなかったよ」や「あー、気持ちよかった」といったつぶやきが子どもから発言されたことから、運動すると心と体に変化が見られることや、それらの変化には個人差があることを認識させることは可能であると考えた。

単元が終わり、子どもたちの運動遊びへの取り組み方や仲間との関わり方を称賛した。そして、「幼稚園の年長さんも、みんなみたいに、これらの運動遊びを楽しめるかな」とつぶやいた。すると、子どもたちが笑顔で「△△幼稚園に遊び方を教えに行こうよ」、「私は、絵を描いて紹介したいな」(図10)、「手紙書きたい」(図11)、「それいいね」と次々に発言した。これらの姿から、運動遊びは、子どもの心の成長により影響を与えるものだと確信した。

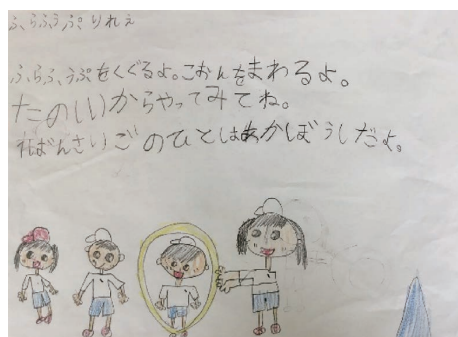


図10 「フラフープリレー」の説明

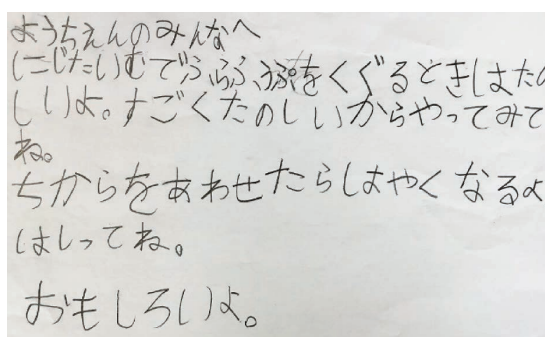


図11 子どもの手紙

5. おわりに

本研究では、幼児期の教育や運動遊びの先行研究の検討を踏まえ、幼児期後期の運動遊びの要点として①ルールがやさしく、運動の得手不得手に関係なく誰もが楽しめるようにする、②クラス全員で共通の目的に向かって取り組むことができるルールを設定する、③心と体の変化に気付くことができる場を設定する意義を明らかにした。また、幼児期の運動遊びは、子どもの心と体の成長に

大きな影響を与え、挑戦意欲や思考力、仲間意識や感性などを高めることにつながることも明らかとなった。本研究では、幼児期を終えた小学1年生を対象に実践と考察を行ったが、今後は幼児（特に5歳児）に実践して比較検証を行っていきたい。さらに、3歳児から5歳児までの幼児の運動遊びについても研究を継続し、どのようにして幼児期の終わりまでに育ってほしい姿につないでいくかを計画的・継続的に研究したい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 (2020) 「新型コロナウイルス感染症対策のための小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における一斉臨時休業について (通知)」。 https://www.mext.go.jp/content/202002228-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf (2021年8月1日最終閲覧)。
- 2) スポーツ庁 (2021) 「学校の水泳授業における感染症対策について」。 https://www.mext.go.jp/content/20210414-mxt_kouhou01-0000045201.pdf (2021年8月1日最終閲覧)。
- 3) 文部科学省 (2020) 「Q&A (学校設置者・学校関係者の皆様へ) 学校行事に関すること」。 https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00040.html#q5 (2021年8月1日最終閲覧)。
- 4) 小野次朗・榊原洋一 (2020)。『幼児と健康 日常生活・運動発達・こころとからだの基礎知識』。ジアース教育新社, p. 12。
- 5) 文部科学省 (2018)。『幼稚園教育要領解説』。フレーベル館, p. 145。
- 6) 櫻木真智子 (2020)／重安智子・安見克夫編著。『保育内容「健康」遊びや生活から健やかな心と体を育む』。ミネルヴァ書房, p. 65。
- 7) 同上, p. 67。
- 8) 文部科学省 (2018)。『幼稚園教育要領解説』。フレーベル館, pp. 10-17。
- 9) 同上, p. 4, pp. 50-73, pp. 92-93, pp. 142-143。
- 10) 同上, pp. 145-166。
- 11) 文部科学省 (2017)。『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 体育編』。東洋館出版社, pp. 105-107。
- 12) 米谷光弘 (2010)。『からだを動かすあそび365』。ひかりのくに株式会社, p. 9, pp. 114-116。
- 13) 酒井俊郎 (2012)／宮田和義・春日晃章・村瀬智彦編著『幼児のからだところを育てる運動遊び』。杏林書院, pp. 129-141。
- 14) 紀村修一 (2012)／白旗和也・水上哲彦編集。『小一教育技術9／10月号』。小学館, pp. 102-103。